

1930年代～50年代のジョージ・H・カーと 環太平洋文化交渉の地政学

吉原 ゆかり

1. はじめに

本稿では、ジョージ・H・カー (George H. Kerr: 1911～1992) の1930年代～1950年代日米文化交渉にまつわる活動を研究対象として、カーの書簡や同時代関係資料を分析し、カーの来歴から1930年代から冷戦期にいたる日米間の文化交渉の諸相を探ることができると主張する。

人気のあったのは英語教師のロイド氏である。痩身に茶色い髪毛をしたこのアメリカ人は多分三十歳前後であったと思う。日本歴史を専攻したとかで、かなり巧みな日本語を喋った。彼は内地人学生が嫌いで、その反面、台湾人学生とはうちとけて話した。(邱「濁水溪」第一部 57)¹

邱永漢 (1924～2012) の小説「濁水溪」(1953) の一場面である。人気アメリカ人教師として登場するのが「ロイド氏」だ。モデルは、1937年～40年、台北高等学校・台北高等商業学校で教鞭をとったジョージ・H・カーだ²。邱永漢 (本名・邱炳南) は、台北高等学校でのカーの教え子だった³。

本論文では、カーの1930年代～1950年代の東アジアでの活動と、それが米日の文化政策において持った意義を分析する。アジアにおける英語・英米文学の制度史を研究対象とする私のカーへの関心は、彼が日本植民地支配下の台湾で英語教育にあたったアメリカ人であったという点から始まっている。日本植民地支配下のアジアにおける英語教育・英米文学教育 (研究) が、1945年の日本からの解放以降、どのように引き継がれたのかあるいは消去・忘却されていったのか、また英語教育・文学教育研究が、冷戦アジアの文化形成とどのように交渉関係をもったのかを考えるプロジェクト⁴に携わるなかで、カーに関心を抱くようになった。カーは、1930年代後半に日本の植民地教育の一環として行われていた台湾での英語教育に携わった一方、第二次世界大戦後、ア

アメリカのヘゲモニー工作の一環を担った地域研究としてのアメリカ研究が、東アジアで制度として確立されていくプロセスに深く関わりあっていくことになる。カーの経歴を理解することにより、アジア地域における英語・米英文化／文学教育（研究）が有していた意義を理解することができるはずである。

カーは、1947年2月28日に発生した、国民党による台湾支配に対する台湾人の抵抗運動と、それに引き続いて起きた弾圧⁵をドキュメントした*Formosa Betrayed* (1965) や、沖縄研究で広く知られており、カーと台湾228事件（蘇，Benda）、カーとアメリカの台湾・沖縄支配関連の業績について（泉水）は、すでに充実した研究が存在する⁶。しかしながら、カーの台北での教師時代や、それに先立つハワイでの大学院生時代（1934～35）、つづく東京留学時代（1935～37）についての研究は管見のおよぶ限り見当たらない。台湾時代につづくコロンビア大学での大学院時代（1940～41）や、1950年～56年に東京大学で行われた「東京大学・スタンフォード大学アメリカ研究セミナー」のプランニングおよび実務で活躍した経緯についても、現在の時点で十分な研究が行われているとはいえない。

そこで本稿は、1930年代～50年代のカーの活動全体を考察対象として、その時代のカーの活動と、日米間の文化交渉の全体像に迫ることを目指す。

カーのこのような経歴の背後には、環太平洋海域における1930年代～1950年代の文化外交の歴史がある。カーは、「満洲」事変（1931）、日本の国際連盟脱退（1933）などの国際政治が行き詰まるなかで、文化面での国際交流に活路を見出すことが目指された、カルチュラル・ディプロマシーのネットワークのなかで、東京で日本研究を行い、台湾で英語教育にあたることになる。1930年代～1950年代の米日文化外交で大きな役割を果たしたのが、カーも関係したアメリカを本部とする太平洋問題調査会（Institute for Pacific Relations: 1925-1960. IPR）や、日本の国際文化振興会（1934-1972. KBS）であった。

カーは真珠湾攻撃（1941. 12. 8）時、コロンビア大学の大学院生であり、角田柳作（1877～1964）、ジョージ・サンソム（1883～1965）、ハロルド・ヘンダーソン（1889～1974）、ヒュウ・ボートン（1903～95）などのもとで、中国・日本研究を行っていた。これらの人物たちは、1930年代の、主にIPRのネットワークを通して相互に結びついており、また、ヘンダーソンが戦後日本の教育改革で中心的な役割を果たし、民間情報教育局（CIE）課長として「天皇人間宣言」の第一草案を作成した（鈴木 100）ことからわかるとおり、

敗戦後の日本再構築に大きな影響力をもつことになる人物たちである。

カーは戦時中「台湾関係専門家」として、戦争情報局（OWI）を含めた政府機関・軍機関で働く。終戦後、1945年10月に台湾省行政長官・陳儀（1883～1950）に随行して台北に赴任する。彼の生涯の痛恨となるのが、かつて台北高等学校や台北高等商業学校で教えた教え子たちや知己たちが、1947年の228事件に巻き込まれていくさまを目にしながら、自分がなんらの効果的な救済の手を打つこともできなかったことであった。カーは1947年3月台湾を離れ、帰国する。

台湾を離れた直後、日本におけるアメリカ研究セミナー計画を起草、計画実現に向けて盛んに活動を繰り広げる。これは1950年～1956年の「スタンフォード大学・東京大学アメリカ研究セミナー」として実現することとなる。カーは、台湾の蒋介石政権に批判的な者たちが、共産主義者あるいはそれに共感を抱くものとして、マッカーシー旋風の攻撃対象となった時代風潮のなか、親共産主義者の疑いをかけられ、1956年フーヴァー研究所を追われる。

このようなカーの履歴と、1930年代～1950年代の米日文化外交力学との諸関係を探ることが、本稿の目的である。

1.

カーは長老派牧師Thomas Kerrを父として、1911年11月、ペンシルヴァニア州パークスパークに生まれた。リッチモンド大学で学んだのち、1932年フロリダのローリンス・カレッジで学士号（哲学）を取得する。1934年ハワイ大学大学院に入学、アジア研究を学ぶ。中国留学を目指していた（GHK4C01023）。

しかしカーがハワイで東京帝国大学教授・蠟山政道（1895～1980）と出会ったことが彼の進路を変えた。蠟山は、国際文化振興会（KBS: the Society for the Promotion of International Culture）会長であった近衛文麿（1891～1945）に随行して北米訪問、その後ハワイに渡り、1934年9月から12月まで、ハワイ大学で講義中であった。

当時の新聞によると、近衛・蠟山の渡米は「満洲事変以来日本に対する列国の誤解」を解くために、外務省文化事業部がKBSと連携して実施したもので、欧米各国に「文化使節を派遣」し、「文化を通じた外交」を行うための事業⁷であった。「満洲事変」（1931）や日本の国際連盟脱退（1933）などのハー

ドな政治局面での日本の孤立危機を「文化を通じた外交」のソフト・パワー外交で打開することが目指されたものである。近衛・蠟山の訪米について述べた報知新聞の記事は、「世界各国間に日本文化研究熱」が高まりつつある現況に対応して、「文化外交」とも称すべき日本文化の紹介」を行う必要が増大していると書く。「極東の盟主」としての日本の地位を世界に知らしめることが目指されていた。近衛の訪問先に、「アジア・太平洋を中心的なテーマとするものとしては世界最初の国際的民間団体である」太平洋問題調査会（IPR）関係者が多かったことは注目に値する（高光 2）。

カーは留学先を中国から日本に変更した。1935年6月19日来日、蠟山の支援を受けつつ、東洋文庫、東京帝国大学図書館、KBS図書室で日本社会史の調査を行い、KBS奨学金を得る。当時の新聞はカーのKBS奨学金獲得について、「ひた押しの“ニッポン研究”に酬いらるる米青年」と報じている⁸。カーは1935年～37年の2年間KBS奨学金を受けて日本芸術史に関する著作の出版計画を進め、原稿は1937年にはほぼ完成を見ていた。英語学者・市河三喜（東北帝国大学教授 1886～1970）の支援を受け、北星堂から出版予定であったが、戦時中に北星堂社屋が焼失、原稿は失われたという。

ここで、カーの東京留学が、当時の日本の文化外交というより広い文脈において持っていた意義を確認するために、カーが奨学金を受けていた当時のKBS（1934年4月11日設立）の活動⁹の一部を見ておきたい。

1934年に、「英国のシェークスピア協会より日本に於るシェークスピア研究の報告を要求」してきているのに応じて、九州帝国大学教授・豊田実（1885～1972）¹⁰に「日本に於けるシェークスピア研究の現状」執筆を依頼し、原稿料五百円をKBSが補助することが決定している（第14回理事会 5）。東北帝国大学教授・土居光知（1886～1979）の提案によるもので、出版は「英国協会」が引き受けるとされている。

この「英国協会」とは、現在のブリティッシュ・カウンシルの前身であるBritish Council for Relations with Other Countriesだろう。この協会とKBSは同年に設立されている。KBS機関誌に掲載された次の記事では、KBSの、英国British Council for Relations with Other Countriesへの対抗意識が読み取れる。

英国、文化宣伝の必要を悟る

自国を太陽の没する所なき大帝國として誇り地球上を我物顔に横行闊歩

し自国の文化宣伝をする気配など葉にたくも見せなかった英国も、時勢の変化に鑑み国策遂行上自国の文化を諸外国人に理解せしめる必要を痛感するに至り昨一九三五年ロンドンにBritish Council for Relations with Other Countriesを設立し遅滞ながらも文化宣伝事業に其第一歩を踏み出した。（『十年度事業報告書』126）

グローバルな政治的覇権を握っていたために、文化外交には関心の薄かった大英帝国もまた、「時勢の変化に鑑み国策遂行上自国の文化を諸外国人に理解せしめる必要」を感じ、British Council for Relations with Other Countriesを設立したのだとしている。

アメリカ関係では、American Council of Learned Societies (ACLS: 1919～) 会長モーティマー・グレーヴスの提案を受け、アメリカ人若者の日本留学を補助し、日米文化事業に当たるべき米国人を養成することを目的としたKBSフェロシップが可決されている（第7回理事会 n.p.）ことが注目される。

極東研究で日本に滞在する外国人研究者が増加傾向を見せはじめているにもかかわらず、日本側の支援体制整備が不十分であるという状況を打開するために、在日外国人研究者の発案で、1935年10月15日～12月6日に、「セミナー」「レクチャー」「一般向け講演」で構成されるKBS Seminar-and-Lecture Series on Japanese Cultureが開催されている（*KBS Quarterly* 1.3 18-21）。講義・ディスカッションとともに日本語で行われた少数精鋭の「セミナー」に参加したのはヒュウ・ボートン、リチャード・ファーズ、エドウィン・O・ライシャワー、ハワイ出身のチトシ・ヤナガの若手アメリカ人日本研究者で、彼等はのちのアメリカにおける日本研究と、米日関係に甚大な影響を与えていくことになる（ボートン 563f）¹¹。KBS奨学金で研究中だったカーが、ファーズらのKBSセミナーに参加した可能性は高いだろう。

カーが、当時アジアの多くの国・地域が列強の植民地とされていた状況に関心を抱いていた点にも注目できる。カーは東京時代、早稲田大学第二高等学院で英語を教えていた時期の経験について、1972年に書かれた略歴で次のように書いている。

I [...] met several Formosan Chinese students, students from Okinawa, and from several countries in Asia — Indonesia, Korea, China, Thailand, and

India. We had many long talks about British, American, French, Dutch and Japanese colonial policies and conditions.

台湾¹²、沖縄、インドネシア、中国、タイ、インド出身の若者たちと、欧米と日本の植民地支配について語り合ったという（GHK2A06008）。このような関心の持ち方と、後にカーが台湾・沖縄情勢に対してコミットしていくあり方とは、無縁ではないだろう。

東京留学後、カーは日本支配下の台湾に、台北高等学校・台北高等商業学校の英語教師として赴任することになる（1937年8月～41年3月）。前述のとおり、邱永漢は、カーが台北高等学校に赴任した当時、尋常科第二学年に在籍していた。邱の上級生で、カーの教えを受けた者には、父（林茂生：1887～1947）¹³が228事件で行方不明となる林宗義（1920～2010）や、やはり228事件で行方不明となる王育霖（1919～1947）がいる。王育霖の同級生には、台湾生まれで、後に京都大学哲学教授となる上山春平（1921～2012）¹⁴がいた。

ふたたび邱永漢『濁水溪』の「ロイド」氏を参照しよう。「ロイド氏」が台湾を去る決意を語る場面である。

「私、アメリカ帰ります（中略）台湾もうだめです（中略）でもそのうちにまたきます。」（中略）南京では汪精衛を首班とする傀儡政権が成立した。（中略）[引用者注：ロイド歓送会の]宴会が終わると、ロイド氏が一人だけ先に帰った。われわれと集会したことが知れると、お互いのために不都合が生じるからである。（中略）彼が当局から国外退去を命ぜられたのだという風説が立った。（第一部 58）¹⁵

2.

アメリカに帰国したカーは、コロンビア大学大学院でアジア研究を行う。日本語はポートンとヘンダーソンの指導を受け、日本文化史はサンソムと角田柳作の指導を受けた。

日本文学研究者であるドナルド・キーン（Donald Keene: 1922～）は自伝で、自分のコロンビア大学学部時代の1941年夏期休暇中、当時大学院生であったカーやポール・ブルーム（Paul Blum: 1898～1981）とともに、当時

19歳の学部生であった自分が、ノース・キャロライナのカー家のサマーハウスで行った日本語自主合宿について書いている (Ch. 6)¹⁶。その合宿で日本語チューター役を果たした、カーの台湾時代の教え子で、アメリカ生まれの Inomata とは、カーの台北高等商業学校での教え子、猪俣正 (James Tadashi Inomata) のことである。

カーの自筆略伝によれば、真珠湾攻撃の際、カーは太平洋の戦争はフォルモサ (台湾) を巻き込まざるをえないことを直感、自ら志願、「台湾スペシャリスト」として軍に勤務することになったという。台北の地理を知悉していたカーは、台北の台湾人居住地域を避け、行政地域や台湾神社など日本人関連地域のみを攻撃目標とする空襲案を立案するなどの活躍を見せる。1943年後半、ジョン・ロックフェラー三世 (1906～78) がペンタゴンに現れ、今後に見込まれる台湾占領政策時代の政策作成のために、カーの台湾に関する知識を活用することを進言したという (GHK2A0668)。

1945年10月、カーは米国海軍大尉として、台湾省行政長官・陳儀 (1883～1950) に同行、台湾再訪を果たす (その後1946年副領事)。台北高等学校・台北高等商業学校教師時代からつながりのあった、かつての教え子や知り合いとのネットワークが、カーの活動に活かされた。

しかし、台北高等学校での教え子・王育霖や、昔からの知己が228事件弾圧のなか、姿を消し、殺害されていく。生前の王育霖の、自分は上官の腐敗を告発したために検事職を追われたが、義務を果たしたまでのことで悔いてはいないという内容の自分宛書簡 (1946年9月18日：失踪の約半年前) に、育霖失踪後、カーは次の注釈をつけている。

This is from “Prosecutor Wang” (Wang Yun-lin) who was forced to retire from legal profession for one year because of his efforts to prosecute case of gross misuse of relief goods in Hsinchu. In March, 1947 he was seized and killed, first having sent his wife and babies to the American Consulate (to Kerr) for protection. (蘇(上)218)¹⁷

育霖は、カーに保護してもらおうとアメリカ大使館に妻と幼児2人を送り出したあと、拘束され、殺害された¹⁸。

育霖の弟で、のちに日本で台湾独立運動を繰り広げることになる王育徳 (1924～1985 台北高等学校で邱の同級生) は、自身が主催して日本で発行し

た『台湾青年』第6号（1961年2月）「二二八事件特集号」に掲載された「兄・王育霖の死」を、「兄がいつ死んだのか、今もってわからない。死体を確認したわけではないのだ」（「兄」76）と始めている。2011年に出版された育徳の著作では、育霖の失踪とカーとのかわりについて、育霖は、台北高等学校でカーの教えを受けた縁もあり、カーの台湾再訪以降、カーと親しくつきあってきたと述べられている。育徳は兄とカーの「二人は、台湾の将来について、様々な問題を話し合っただけ」としている（「昭和」258）。

逮捕される三日前に、兄はカール氏を訪ねて、今後の見通しと身の処し方を相談していた。カール氏は「逃げろ」と言ったそうだ。先生自身、台北の街をジープで走りまわったとき、どこからともなく狙撃されて、危うく一命を落とすところだったという。（279）

カーが台北を離れる予定だった日、見送りに行こうとしていた育霖は、民間人に変装した軍人に捕らえられる¹⁹。

国民党政府の要求もあり²⁰、カー暗殺の噂もあったため、カーは台湾を離れることになる。カーの、スチュアート大使宛の正式辞任願いは、公式文書の抑えられた表現をとりつつも、苦痛と悲哀に満ちたものとなっている。

My presence in the Consulate during the current civil disturbances appears to have attracted undue attention, including many appeals for official intervention and for personal protection, none of which can be entertained [...]. The violent deaths and the disappearance of many associates, friends and former students has [sic] created a situation which would greatly hamper any further work on my part in the Consulate at Taipei at the present time. (GHK4C01012)

台湾情勢に対するアメリカ大使館の介入や、アメリカによる人身保護を求める台湾のひとびとの声は高い。カーの旧友、元・生徒が悲惨な死を迎え、失踪しているなかであって、カーは中立を保つことが困難であり、副領事としての職務を全うすることはできない。彼は、1947年4月4日辞職。上海・東京・ハワイ経由でアメリカに帰還する²¹。

3.

1950年～56年に東京大学とスタンフォード大学によって共催された「東京大学・スタンフォード大学アメリカ研究セミナー」（以下、「セミナー」）の原型は、台湾228事件の直後、1947年5月にカーによって最初に構想されたものであると考えてよい²²。「セミナー」を1965年時点で回顧した嘉治真三が、カーがセミナーを最初に立案した人物であると発言している²³ほか、スタンフォード大学に残されている「セミナー」関係資料の多数²⁴に、キー・パーソンとしてカーの名前がある。

セミナーについての従来の研究においては、スタンフォード側での中心人物は学長スターリング（1906～1985）や、クロード・バス教授（1903～98）であるとされてきた。しかしながら本稿は、カーがセミナーの初期時点での構想者であり、「セミナー」を可能にした人的ネットワークの形成を含めた実務面においても、カーが大きな役割を果たした可能性が強いと主張したい。証拠とするのは、スタンフォード大学に残されているセミナー関係の資料、とくにカーと、スタンフォード側の実質上の議長であったディヴィッド・ゴヒーン教授（1907～1994）²⁵とのあいだで交換された書簡である。

「セミナー」が冷戦体制強化のなか開催されたことが重要である。1930年代以来IPR人脈と関係が深かったカーは、1950年代冷戦下、アメリカの安全保障上危険な人物とみなされ、1956年、スタンフォード大学・フーヴァー研究所の職を追われていく。このことは、単にカーひとりの不幸であるというばかりでない。環太平洋地帯についての最大の研究団体であったIPRが、共産主義に親和的な人物たちの温床として、1961年、解散を余儀なくされていくことと、カーの軌跡は平行をなしている。その意味で、1930年代～50年代のカーの経歴を考察することは、同時代のより大きな潮流を検証することでもある。

スタンフォード大学所蔵の、「セミナー」に関連した一次資料を精査した研究は、管見のおよぶ限り、現時点では存在しない²⁶。

「セミナー」を、1945年以降、旧敵国でのアメリカについての知識を広げ、親米意識を育てていくという、アメリカの文化外交戦略の一部のなかに位置付ける必要がある。かつての敵国であるドイツ人の再教育を目指して1947年に始まった「アメリカ研究の世界輸出の嚆矢といえる第一回ザルツブルグ・セミナー」（宮本 59）が、「セミナー」のモデルとなっている。ザルツブルグ・セ

ミナーに触発されたスタンフォード大学のバス²⁷が、1949年に「東京大学・スタンフォード大学アメリカ研究セミナー」へのロックフェラー財団の支援を取り付けた(越智 31～37)。東京大学教授・IPR常任理事高木八尺(1889～1984)の尽力もあり1949年末に東京大学総長・南原繁(1889～1974)がスタンフォード大学を訪問した際、同大学スターリング学長(1906～1985)とのあいだで合意が成立した。「セミナー」とアメリカの対日文化政策との関係については、松田の研究に詳しい²⁸。

「セミナー」の実施場面での中心人物であったスタンフォード大学ゴヒーン教授の要請に応じて1956年にカーが作成した「セミナー」プレ・ヒストリーに関する叙述(SC265 3:1)を検討すると、カーが1947年3月台湾を退去し、上海・東京・ハワイ経由でサンフランシスコに移動する時点においてすでに、のちに「セミナー」に発展するものの立案を始め、台湾関係業務の残務処理の合間を縫って、忙しく動き回っていることがわかる²⁹。台湾での経験と、のちに「セミナー」に発展するものの立案との関係については、カーは一切触れていないが、時期的に見て、カーがこの立案を行った際に、台湾での経験が念頭にあったと考えても無理はないだろう。筆者は、「セミナー」の主な目的は日本におけるアメリカ理解を広めることにあったが、同時にカーは、長期的には、アメリカにおけるアジア理解を広めることを目指していたものと考えている。後述するように、カーが「セミナー」実施につづく時期に、アメリカ人によるアジア研究を充実させるための組織・制度、日本人研究者のアメリカ在外研究、東京の日本語教育センター、台北の中国語センター構想を練っていたと考えられるためである。

カーが「セミナー」についての相談を持ちかけたひとびとは、東京時代以来の知己・蠟山、グレーブス、ファーズ、ライシャワーを初めとする、アジア極東地域とアメリカとの文化交渉で大きな役割を果たしたひとびとである。多くのひとが太平洋問題調査会(IPR)と関わりをもっていた。

「1947年5月ジョージ・H・カー作成」と記されている“An Institute for American Studies in Japan 1948-1958”(GHK1N01001)の表紙には、日本の教育機関でアメリカ諸制度・伝統研究を促進し、米日間の科学・芸術・人文科学に関する知的交流を涵養し、日本・中国を研究するアメリカ人研究者のためのセンター設立を目指すという、この提案の中心理念が示されている。以下、この文書の大略を述べる。この文書の「概要」では、日本再建の時代に、日本にアメリカ研究機関を設立することの重要性が述べられている。「序言」は、

1948年という年は、極東においてアメリカが担うべきリーダー役割が危機を迎える年となるであろうという文言で始まる。日米安保条約締結後・アメリカによる日本の直接支配終了後も、日本におけるアメリカの影響力を維持していくために、日本におけるアメリカ研究制度の確立が肝要であると論じられる。

つづいてカーは、この提言を行う動機は、戦争前に日本で研究生生活を送ったときに、自分自身さまざまな困難に直面した経験から来ているとする。カーの恩師・コロンビア大学の角田柳作が、戦争前の日本にはアメリカ研究センターが存在しなかったことを指摘したことからもインスピレーションを得た³⁰。つづいて、全体像、組織図、他組織との関係、フェローシップ、研究資料整備、図書館サービス、資金調達、予算案などについて、30ページにわたりプランが提示されている。

ゴヒーンの依頼に応じてカーが作成した忘備録（1956年5月28日付）（SC265 3:1）には、カーが1945年日本を再訪した際に再会した旧知のひとつと多くが、戦前日本の大学ではアメリカ研究が実質上存在しなかったと指摘し、アメリカ社会に関する無知が戦争の原因となったと指摘したとある。敗戦後まもない日本では、アメリカの成功と強さの秘密を知りたいという機運に満ち満ちているが、軍政が終われば、反動的に反アメリカ感情が生じてくるだろうことは想像に難くない。日本と西洋の非全体主義国家との交流が断られた1935年以降の時期におけるアメリカの変化に関して、日本の知識をアップデートする必要もある。アメリカ研究唱導には政治的な危険が伴うが、日本の大学が根本的に改革されつつある今であれば、アメリカ研究という新領域を導入し、大学カリキュラムの一環に組み込むことに大きな反対は起こらないだろう。日本の大学関係者に、アメリカに強要されたという思いをもたせず、地域研究としてのアメリカ研究設立への協力を取り付けるためには、日本側がイニシアティブを取ることが奨励されるべきである。そのためにも、占領軍や国務省情報部局の資金ではなく、民間基金による資金でアメリカ研究は行われるべきである。占領軍は過度のアメリカ化を推し進めつつあるが、アメリカ研究を日本に根付かせるためには、セミナーのアメリカ側からの参加者もまた日本社会に強い関心を抱いていることが示される必要がある。

同じくゴヒーン宛の“Background Notes on ‘An Institute for American Studies in Japan’”（SC265 3:1.日付なし）でも、占領終了後に予測される反アメリカ感情の高まりに備えるために、アメリカ研究設立は喫緊の課題であると強調されている。日本経済回復が十分ではないなか、「セミナー」にアメリカ

カ側の資金提供が必要なことは明らかであるが、日本側が「セミナー」をアメリカの押し付けとは考えず、自主的にアメリカ研究設立を希望する形式を取る必要がある。対等で相互的な関心に基づいた「双方向的交流 (a two-way exchange)」でなくてはならない。

総じて、占領終了・講和条約後に予測される反アメリカ感情を予防するための機関・制度としてアメリカ研究設立の必要性が説かれていること、米日の協力に基づいた「双方向的交流 (a two-way exchange)」が要請されていることが印象的である。カーの案は、越智が精緻に分析した、「講和条約後を見据えて、日米文化交流を提言する報告書、いわゆる「ロックフェラー・レポート」」で示された方向性に沿うものである。越智が克明に分析したとおり、ロックフェラー・レポートでは「文化交流の長期的な目標は、「相互理解と、生活様式の理解を進め」ることであり、その目標を達成するためには「一方的 (unilateral) であること」が避けられねばならず、「双方向 (two-way street)」性が重要である」とされている (27)。越智がロックフェラー・レポートについて「不均衡な力関係による人種化された主体形成のプロセスを覆い隠す」(38) 側面があることを指摘したように、カーのアメリカ研究セミナー案もまた、「文化交流の名のもとに、文化占領の効果を保持する」手助けをするという面を有したものであつたらう。

4.

ここでは、カーがスタンフォード大学・フーヴァー研究所を辞職せざるをえない事態 (1956) に追い込まれた経緯を確認したい³¹。そのことにより、カーが「セミナー」立案・実行に関与したのち、台湾 228 事件に関する著作 (*Formosa Betrayed*) の出版 (1965) にこぎつけるまで、さまざまな苦難に遭遇した経緯を、冷戦期アメリカの環太平洋文化外交・文化政策が、左翼的であるとみなされたひとびとへの弾圧の影響を強くうけつつあったという、より大きな社会的・文化的・政治的文脈のなかに配置してみることができるはずである。

まず、「セミナー」が実施されていた時代について確認するため、ゴヒーンが 1981 年の時点で、「セミナー」を回顧した文章を参照したい。アメリカ軍政下に置かれた日本を見て、自由世界から来たアメリカ人「セミナー」参加者は、驚愕した。まだ東京や横浜に焼け野原が広がっているなかで「セミナー」

は開催され、そこに朝鮮戦争が勃発した。一方、国家によるコントロールからは自由な立場で行われた「セミナー」は活気あふれる友好的なものであった。ゴヒーンは「セミナー」は占領時代の終わりを告げる出来事であったとポジティブに捉えているが、裏面からいえば、「セミナー」は冷戦体制強化のまっただなかで行われたのだともいえる³²。

ここで、冷戦体制強化のなかでIPRが経験した苦難と、それにカーが寄せた苦慮を検討したい。カーは1953年12月18日付のゴヒーン宛書簡(SC266 2:5)で、現在、太平洋問題調査会(IPR)アメリカ支部が親共産主義的であるとしてマッカーシズムの攻撃ターゲットにされており、崩壊の一步手前にあること、IPR日本支部も左翼偏向であるとして攻撃されていることに注意されたいと書いている。1954年京都で開催される国際IPR会議の前後には、IPRへの攻撃はさらに激化するだろう。「セミナー」出席者は京都IPR会議出席を希望するかもしれないが、IPRに向けられている攻撃が「セミナー」に向けられないよう、慎重を期すべきだ。IPRと「セミナー」が無関係であることを公式の場で発表する必要がある。カーが神経質になっているのには理由があった。1年前、東京・駿河台のフーヴァー図書館³³を極左団体集會に用いられ問題となったことがあったのである。

IPRは1925年に太平洋地域に関心をもつ人々によって創設された民間の調査研究団体で、ウィルソン主義・大正デモクラシー的なりべラリズムを基調とした。日本は1926年に加入、1931年「満洲」事変、1933年国際連盟脱退などで政府レベルでの日本の孤立が深まるなか、IPR関係者が民間交渉レベルでの交渉を担った。しかし、IPRにおいても日本のアジア侵攻に対する批判が高まり、ヨセミテ会議(1936)を最後に日本はIPRを脱退する。日本IPRの主要人物たちは「大東亜共栄圏」の支持者になっていくことになり、国際主義的りべラリズムの脆弱さを露わにする結果となった³⁴。

カーが「セミナー」立案の際に相談をもちかけたひとびとの多くが、1945年以前からIPRやKBSのネットワークに連なるひとびとであった。カーが初来日を果たすことになるきっかけとなった蠟山もIPRに関係していた。カー自身、1940年代にIPRアメリカ支部の機関紙である*Far Eastern Survey*に7本の論考を発表している。1942年と45年に出版された記事は、日本からの解放後の台湾に大きな期待を寄せるものであるが、1947年228事件以降の記事では、国民党政府とアメリカの対台湾政策への絶望が色濃い。

カーの辜寬敏³⁵(Richard Koo: 1926～)宛書簡(GHK4E1047)(1966年2

月1日)によれば、1949年～50年ころ、IPRとアメリカ国務省関係者のなかには、台湾を共産党中国の支配下に置き、蒋介石の失墜を決定的なものにする必要があると確信していたひとびとがいた。そこにIPRが親共産主義的とみなされる一因があったのだろう。1950年～60年の共和党支配のアメリカでは、蒋介石政権を批判することがすなわちアメリカに対する反逆であるかのような風潮が強かった。佐々木によれば、1951年に親共産主義者を弾劾する上院司法委員会国内治安小委員会の聴聞を受けることになるエドワード・C・カーター(元IPR事務総長)は、「反蒋介石」的立場を取ることと「親共産主義者」とを等値する論理がまかり通ってきており、IPRが「親共産主義団体」であるというイメージが広まっていることに対して懸念を示していたという(168)。1950年代になると、IPRは「アメリカの中国政策を失敗に至らしめた陰謀的団体であるという烙印を押され」(中見 104)、カーが「セミナー」案を相談したノーマンやラティモアは、マッカーシズムの犠牲となっていく。

「セミナー」参加者がIPR京都大会に出席するのではないかというカーの危惧は現実化し、1954年第12回大会には、「セミナー」のメンバーである、ハロルド・フィッシャー、ノブタカ・イケ、パスが参加している³⁶。フーパーによれば、1954年京都大会は、IPRの団体解散の可能性が初めて話し合われ始めた大会であった("The Institute" 116)。IPRは1961年に解散した。

このような、左翼的とみなされた人物がさまざまな苦難に遭遇したマッカーシズムの嵐のなか、カーは1956年6月30日にフーヴァー研究所を自主退職せざるをえない立場に追い込まれている。1985年の時点から当時を回顧した文書(GHK5D01035)でカーは、自分が作成したアジア事情に関する授業シラバスが国民党の手に渡った可能性がある」と記している。彼に突きつけられた審問内容は、1947～49年のワシントン大学(シアトル)極東研究所での講義で蒋介石批判を行ったのはなぜか、戦争前にIPRの会員だったのはなぜなのか、というものであった³⁷。

第二回の審問では、カーが極東研究所で、合衆国に協力する可能性のある台湾リーダーの名を政府エージェントに明かすようにという要求を拒否した理由が糾問された。その理由として228事件の際、自分がアメリカ外務省に提出した台湾リーダーたちの名前リストが、国民党の手に落ち、リストに載ったひとびとが死を含めた苦難を経験したことがあったため、同様の展開になることを恐れてこの要求を拒否したのだとカーは書いている。

自分がこのような審問を受けるにいたる背後で、ワシントン大学(シアト

ル) 極東研究所のジョージ・テイラー (1905～2000) が動いていたものとカーは推測している³⁸。学部生として1920年代にバーミンガム大学に留学していたころ左傾していたテイラーは、戦時ワシントンで機密を要する職に就こうとして、この過去のために困難に直面した。カーによれば、テイラーは1950年代180度態度を逆転させ、下院非米活動委員会など、中国国民党よりの団体に盛んに活動していた (GHK5D01034)。

テイラーの密告が、自分がフーヴァー研究所からの自主退職に追い込まれる原因であったというカーの推測の正否は現時点で確認できないが、一定の信憑性を備えている。カミングスは³⁹ 冷戦期アメリカの大学における地域研究をターゲットとした反共運動を巡る論文で、地域研究ではもっとも歴史の長いワシントン大学が、大学におけるレッド・ページの先鋒を切ったとしている。たとえば、李承晩政権に批判的だった韓国出身の研究者ハロルド・スノが大学辞職に追い込まれたのは、ワシントン大学の極東研究センターの所長であったテイラーが彼をFBIに告発したからであった。皮肉なことにテイラーに左翼もしくは共産党シンパの疑いがかけられることもしばしばあった。戦時情報局 (OWI) やIPRでの彼の活動が問題視されたのである。テイラーは、IPRへの関与が問題視されたオーウェン・ラティモアに対して、マッカラン委員会で不利な証言を行っている⁴⁰。

ゴヒーンやサンソムは、カーのスタンフォード大学でのポストを確保しようと各方面に働きかける。国際協力局 (ICA) 資金を確保するために、セキュリティ上危険であるとみなされたカーが自主退職に追い込まれるのを黙認した、フーヴァー研究所のイーストン・ロスウェル (1924～1995) 宛の書簡で、ゴヒーンは、カーはスタンフォードになくはならない存在であり、サンソムの学術上の後継者になるべき人物であると熱弁 (SC266 2:10)、フーヴァー研究所でのカーのポストを確保できないかと書いている。しかしこれは果たせず、カーはハワイに去る⁴¹。

おわりに

本稿では、ジョージ・H・カーの1930年代～1950年代の日米文化交渉にまつわる活動を研究対象として、1930年代から冷戦期にいたる日米間の文化交渉の諸相を探った。

今後の研究の方向性としては、スタンフォード大学・フーヴァー研究所時代

とその後のカーが関係していた複数の国際交流プロジェクトを確認することで、台湾と日本におけるアメリカ研究と、主にアメリカ人を対象としてアジアで開催される中国語・日本語研修の基礎をカーが準備した可能性を探りたい。カーが「セミナー」を構想すると同時並行的に、アメリカ人によるアジア研究を充実させるための組織・制度、日本人研究者のアメリカ在外研究、東京の日本語教育センター、台北の中国語センター構想を練っていたらしいことは、スタンフォード大学のStanford Center for Japanese Studies recordやJohn D.Goheen papers, 1936-1977の資料からうかがい知ることができる⁴²。今後詳細な資料検討が必要である。

1961年に設立された「スタンフォード大学日本研究センター」(東京)は、現在のアメリカ・カナダ大学連合日本研究センター(横浜)の原型となっており⁴³、初代所長をゴヒーンが勤めている。スタンフォード大学日本研究センター設立においても、カーが持っていた人脈や情報が大いに役立てられたと考えられる。現在台大国際華語研修所(ICLP)(台湾大学)の前身は、Inter University Programでスタンフォード大学が主体となり1962年に台湾大学に設立された。それに先立って、スタンフォードが主体となった中国語センターが国立台湾師範大学に置かれていた。国立台湾師範大学が日本支配時代の台北高等学校を引き継ぐものであったことを考えると、カーの関与の可能性はさらに高いものとなるだろう⁴⁴。さらにカーの沖縄との関わりを念頭に入れば、カーのヴィジョンは太平洋に面したアジア地域とアメリカを結ぶ知的交流ネットワーク、「一方的(unilateral)」なものでない、「双方向(two-way street)」的相互理解にあったことが想像できるだろう。そのような双方向的相互理解のためのシステムやインフラもまた、アメリカの文化帝国主義の一装置、アメリカのグローバルな覇権を目指す文化外交の手段として包摂されてしまう危険性はたしかに存在する。それを踏まえたうえで、カーが成し遂げたこと、挫折せざるをえなかったことから、カーの後を引き継いで展開した環太平洋の文化交流とその政治学を見据えた研究が必要とされている。

付記 本稿は科学研究費(基盤研究(B))「1945年を跨境してーアジアにおける英米文学教育のジオポリティックス」(課題番号16H03392)(研究代表者 吉原ゆかり)の助成を受けている。

略号表

GHK 沖縄公文書館『カー文書』

- SC0265 Stanford University, Stanford Center for Japanese Studies, Records. Department of Special Collections and University Archives, Stanford University Libraries, Stanford, Calif.
- SC0266 Stanford University, American Studies Seminars in Japan Records.
- SC0267 Stanford University, John D. Goheen Papers.

主要参考文献

- アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター『50 Glorious Years: 1963-1961』アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター, 2013年.
- Ashizawa, Kimberly Gould. "The Evolving Role of American Foundations in Japan: An Institutional Perspective." *Philanthropy and Reconciliations: Rebuilding Postwar U.S.-Japan Relations*. Ed. Yamamoto Tadashi, Iriye Akira, Iokibe Makoto. Tokyo: Japan Center for International Exchange: 2006.
- 蕉葉会『台北高等学校（一九二二年—一九四六年）』蕉葉会, 1970年.
- Benda, Jonathan. "Empathy and Its Others: *The Voice of Asia, A Pail of Oysters*, and the Empathetic Writing of Formosa." *Concentric: Literary and Cultural Studies* 33.2 (2007): 35-60.
- ボートン, ヒュー「日本研究の開拓者たち」細谷千博・斎藤真編『ワシントン体制と日米関係』東京大学出版会, 1978: 545-576.
- Cummings, Bruce. "Boundary Displacement: The State, the Foundations, and Area Studies during and after the Cold War." Masao Miyoshi and H.D. Harootunian (eds.), *Learning Places: The Afterlives of Area Studies*. Durham and London: Duke University Press, 2002. Digital.
- Fahs, Charles. "Diary 8 November-29 December 1950." Rockefeller Foundation Archives.
- Shao Dong Fang 著, 陳仲奇訳「スタンフォード大学東アジア図書館の歩み」島根県立大学総合政策学会『総合政策論叢』第22号(2012年2月): 108-110.
- 藤田文子『アメリカ文化外交と日本』東京大学出版会, 2005.
- Goheen, John D. "Recollections of the First Year of the Stratford-Tokyo American Studies Seminar."『東京大学アメリカ研究資料センター年報』第4号(1981): 8.
- Greene, Bob. *Blum-san!: Scholar, Soldier, Gentleman, Spy: The Many Lives of Paul Blum*. New York: Jupiter/RSG, 1998.
- Hooper, Paul F. "The Institute of Pacific Relations and the Origins of Asian and Pacific Studies." *Pacific Affairs* 61.1 (1988): 98-121.
- Hooper, Paul F. *Rediscovering the IPR*. Manoa: University of Hawaii at Manoa, 1994.
- 嘉治真三(語り手) 嘉治教授還暦記念座談会「アメリカ研究と私」『社会科学研究』16(6) (1965): 189-211.
- 金関丈夫「カーの思い出」『琉球民俗誌』法政大学出版局, 1978年: 61-64.
- 加藤幹雄『ロックフェラー家と日本』岩波書店, 2015.
- Keene, Donald, and Akira Yamaguchi. *Chronicles of My Life: An American in the Heart*

- of Japan. New York, NY: Columbia UP, 2008. Digital.
- Kerr, George H. "Formosa: Colonial Laboratory." *Far Eastern Survey* 11.4 (1942): 50-55. Web.
- . "Formosa: Island Frontier." *Far Eastern Survey* 14.7 (1945): 80-85. Web.
- . "Sovereignty of the Liuchiu Islands." *Far Eastern Survey* 14.8 (1945): 96-100. Web.
- . "Kodama Report: Plan for Conquest." *Far Eastern Survey* 14.14 (1945): 185-90. Web.
- . "Some Chinese Problems in Taiwan." *Far Eastern Survey* 14.20 (1945): 284-87. Web.
- . "Formosa's Return to China." *Far Eastern Survey* 16.18 (1947): 205-08. Web.
- . "Formosa: The March Massacres." *Far Eastern Survey* 16.19 (1947): 224-26. Web.
- . *Okinawa, the History of an Island People*. Rutland, VT: C.E. Tuttle, 1958.
- . *Formosa Betrayed*. Boston: Houghton Mifflin, 1965. [ジョージ・H・カー (著), 川平朝清 (監修), 蕭成美 (翻訳) 『裏切られた台湾』 同時代社, 2006年.]
- . *Formosa: Licensed Revolution and the Home Rule Movement, 1895-1945*. Honolulu: U of Hawaii, 1974.
- . "Paul C. Blum: Collector of Books — Collector of Friends." 『ブルーム・コレクション書籍目録』 第1巻: XIX-XXV, 横浜開港資料館, 1982.
- . *The Taiwan Confrontation Crisis*. Washington, D.C.: Formosan Association for Public Affairs, 1986.
- Kerr, George H., and Shuncho Higa. *Bibliography of the Ryukyus*. Naha: U of the Ryukyus, 1961.
- 紀旭峰 「戦前期早稲田大学の台湾人留学生」 『早稲田大学紀要』 44巻(2013) : 147-183.
- 国際文化振興会 『国際文化振興会議事要録 第7回理事会』 1934年6月29日.
- 『国際文化振興会議事要録 第14回理事会』 1934年12月14日.
- 『国際文化振興会昭和十年度事業報告書』 1937年.
- 『KBS Quarterly』 1.2 (1938).
- 駒込武 『世界史のなかの台湾植民地支配』 岩波書店, 2015.
- 熊谷俊樹 「戦後米国のパブリック・ディプロマシーとUSIS-Japan」 *Problemata mundi* 23(2014) : 80-117.
- 邱永漢 「濁水溪 第一部」 『大衆文芸』 新小説社, No. 8(1953年12月号) : 54-87.
- 「濁水溪 第二部」 『大衆文芸』 新小説社, No. 8(1954年9月号) : 43-71.
- 「濁水溪 第三部」 『大衆文芸』 新小説社, No. 9(1954年10月号) : 50-82.
- 『密入国者の手記』 徳間書店, 1972.

- 『わが青春の台湾, わが青春の香港』中央公論社, 1994.
- 中村真理 「太平洋問題調査会と日本の知識人」『思想』728(1985) : 104-127.
- Matsuda, Takeshi. “Institutionalizing Postwar U.S.-Japan Cultural Exchange.”
Takeshi Matsuda (ed.), *The Age of Creolization in the Pacific*. Tokyo: Keishusya,
2001: 41-97.
- . *Soft Power and Its Perils*. Washington: Woodrow Wilson Center
Press, 2007.
- 松田武 『戦後日本におけるアメリカのソフト・パワー』岩波書店, 2008.
- . 『対米依存の起源』岩波現代全書, 2015.
- 宮本陽一郎 『アトミック・メロドラマ』彩流社, 2016.
- Ohmann, Richard. “English and the Cold War.” *The Cold War & the University:
Toward an Intellectual History of the Postwar Years*. New York: The New Press,
1997. 73-105.
- 王育徳 「兄王育霖の死」『台湾青年』第6号(1961) : 76-81.
- . 『「昭和」を生きた台湾青年』草思社, 2011.
- 越智博美 「文化の占領とアメリカ文学研究」『アメリカ研究』アメリカ学会, 第50
号 (2016年3月) : 21-43.
- Sanders, Jane. *Cold War on the Campus: Academic Freedom at the University of
Washington, 1946-64*. Seattle: U of Washington, 1979.
- 佐々木豊 「When I am Weak, Then I am Strong」—“赤狩り”時代のエドワード・C・
カーターの言動に関する一考察—」山岡道男編『太平洋問題調査会 [1925-1961]
とその時代』春風社, 2010, 161-190.
- Schrecker, Ellen. *No Ivory Tower: McCarthyism and the Universities*. New York: Oxford
UP, 1986.
- 泉水英計 「ジョージ・H・カーの極東—米軍統治下における琉球史編纂—」『科学史
研究』第Ⅱ期48 : 252(2009) : 233-7.
- . 「在台湾沖縄人引揚に関する覚書」神奈川大学 国際経営研究所
『Project Paper』No. 25(2012) : 1-25.
- . 「米海軍軍政学校における台湾研究—台北二二八纪念馆所蔵カー文
書による再構成」神奈川大学国際常民文化研究機構 編『神奈川大学国際常民文
化研究機構年報』2013年5号(2013) : 83-100.
- 柴崎厚士 『近代日本と国際文化交流』有信堂, 1999.
- 蘇瑤崇編 『葛超智先生相関書信集(上)(下) (Correspondence by and about George
Kerr)』台北市228纪念馆, 2000年.
- 蘇瑤崇編 『葛超智先生文集 (Collected Papers by George H. Kerr)』台北市228纪
念館, 2000年.
- 鈴木英一 『日本占領と教育改革』勁草書房, 1983年.
- 台北高等商業学校 『台北高等商業学校一覽 昭和十三年度』国立国会図書館コレク
ション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1278256>
- 台湾総督府台北高等学校 『台湾総督府台北高等学校一覽 昭和十二年度』国立国会
図書館コレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1462927>
- 高光佳絵 「1932 (昭和9) 年の近衛訪米をめぐる日米民間団体の協力——「太平洋問
題調査会 (IPR) を中心に」『千葉大学人文社会科学研究』29(2014) : 1-13.

- 高光佳絵「第2章 松本重治の民間国際交流と国家間関係——日本IPRから国際文化会館へ」早稲田大学アジア太平洋研究センター『リサーチ・シリーズ』vol. 6 (2016) : 33-50.
- 東京大学アメリカ研究資料センター『東京大学アメリカ研究資料センター年報』第4号(1981).
- Woods, Lawrence T. “Rockefeller Philanthropy and the Institute of Pacific Relations.” *Voluntas* 10.2 (1999): 151-66.
- 山岡道男編『太平洋問題調査会[1925-1961]とその時代』春風社, 2010.
- 山岡道男「マッカーシズムと太平洋問題調査会に関する研究序説」『アジア太平洋研究』20(Feb. 2013) : 97-108.
- 与那原恵『美麗島まで』ちくま文庫, 2010.

注

- 『濁水溪』は1954年に現代社から単行本として発行され、第32回・1954年下半期直木賞候補作となっている。
- 沖縄公文書館ジョージ・H・カー文書(GHK5J01008)には、『濁水溪』で「ロイド氏」が登場する場面の英訳タイプ原稿が残されており、封筒に“Kyu Ei-Kan’s Dakusui-kei A Fictionalized autobiography in which G.H. Kerr becomes the teacher ‘Mr. Lloyd’”と記されている。
- 1937年カーの台北高等学校赴任時、邱炳南は尋常科第二学年。『総督府台北高等学校一覽 昭和十二年度』, 100, 130 ページ。
- 吉原ゆかり研究代表「帝国日本の英米文学高等教育」(科学研究費挑戦的萌芽研究), 越智博美研究代表・吉原研究分担「ポスト太平洋戦争の「英米文学」研究」(基盤研究(B)), 吉原研究代表「1945年を跨境して—アジアにおける英米文学教育のジオポリティックス」(基盤研究(B))。
- 「1947年2月28日中国, 台湾で起った大陸人支配に対する台湾人の反乱事件。(中略) 省行政長官兼警備総司令陳儀の公舎に向った台北市民デモ隊が機銃掃射を浴び, 死傷者多数を出した。」ブリタニア・オンライン・ジャパン 項目「二・二八事件」。
- 本論文筆者の言語能力が、英語と日本語に限られるため、中国語で書かれた一次資料、中国語研究資料の検討を行うことができなかった。今後の課題としたい。
- 「報知新聞」1934年5月9日(神戸大学電子図書館 新聞記事文庫) http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/jsp/ja/ContentViewM.jsp?METAID=10072118&TYPE=IMAGE_FILE&POS=1 最終閲覧2016年6月1日
- 『東京朝日新聞』1936年1月11日朝刊11面。
- KBSのカーに対する奨学金付与については, *KBS Quarterly* 1.2 (1938), p. 14 (“Mr. George H. Kerr, an American [...] is preparing bibliography and material for teaching Japanese cultural history laying special stress on the social aspects of Japanese fine arts.”) や, 「設立経過及昭和九年事業報告書」(n. p) (「奨学金受領者ジョージ・カー氏期限満了に付継続の件 ハワイ大学卒業, 目下本会にて日本文化史, 美術史研究中のジョージ・カー氏に対する奨学金は九月を以つ

- て期限満了させるが、本人の業績見るべきものあるにより更に一ヶ年間奨学金を授与することに決定。月額百五十円))などで確認できる。
- 10 豊田実の旧蔵書からなる、シェイクスピア上演・研究関係資料を多数含んだ日本英学史資料に、九州大学・筑紫文庫がある。https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/collections/chikushibunko 最終閲覧 2016年6月18日
 - 11 ボートンによれば、1932年グレーヴスの提唱で開催されたアジア研究セミナー(ハーヴァード大学夏期学校)が、アメリカにおけるアジア研究発展の分水嶺となった。このセミナーでは、のちにスタンフォード大学・東京大学日本研究プロジェクト(アメリカン・スタディーズ・セミナーの後続・発展)で中心的な役割を果たしていくことになる岸本英夫(1903～1964。1932年当時ハーヴァード日本語講師、のち東京大学教授)が日本語を担当している。ボートンによれば、このハーヴァード・セミナーは、「ロックフェラー財団の幹部たちの極東研究に対する態度」に大きな影響を与えた(ボートン 557f)という。
 - 12 早稲田高等学院への台湾からの留学生は、1935年34人、36年31人、37年15人である(紀 153)。
 - 13 林茂生と息子・林宗義とを介したカーとの関係について、駒込武はつぎのように書いている。「とりわけ副領事であったカーは、一九三〇年代後半、林宗義が台北高等学校の生徒だった時代に同校の英語の講師をしており、この時期から、林茂生と親しく往来していたという」(駒込 690)。
 - 14 SC0266 2:2に残された資料によれば、上山は1951年「東京大学・スタンフォード大学アメリカ研究セミナー」の哲学部門(ゴヒーン担当)に参加している。上山が台北高等学校時代にカーの教えを受けたことと、「セミナー」への参加に関係があるか否かは、現時点では不明。SC266 1:6には、1951年時点で書かれた上山の英文履歴書がある。
 - 15 ここで邱はカーが「当局から国外退去を命ぜられた」としているが、別のところで(『わが青春』27)は「カー先生がアメリカ海軍に所属し、実は情報員であることはのちになってからわかった」としている。川平朝清はカーについて述べた1988年の“My Mentor”という文章で、1940年カーが台湾を去った際、彼がスパイであったとの噂があったと記している(GHK5J01018)。『裏切られた台湾』巻頭の「カール先生について」で、翻訳の蕭成美と監修の川平は、カーがCIAのエージェントであったという噂があったことについて触れ、「一九三七年に英語の教師として台湾に渡った時、意図的に情報を収集する目的はなかったという彼の言い分を我々は信じている」(20-21)としている。川平と蕭は、台北高等学校第19回(昭和21)理科乙類の同級生であるが、高等学校入学はカーの帰国後である。台北高等学校卒(19回文乙)の泉新一郎は、カーに「アメリカのスパイであるという噂」があり、戦後進駐してきた米軍のなかに彼の姿を見つけたとき「海軍少佐で、フィリピンにいて日本攻略の作戦参謀の一員であったというから、やはり、戦前より情報活動をしていたかもしれない」と書いている。カーは泉をジープに乗せて台北高等学校に生き、その建物は自分が残すように努力したと語っていたという(蕉葉会 345)。カーは、自分にスパイ説があったことを知っていたが、1986年のメモランダムでスパイ説を否定している(琉球大学附属図書館 George H. Kerr 文庫 MEMORANDUM (13 JULY 1986) World War II Papers relating to U.S. Intelligence Service Interests in

Taiwan 302.224).

- 16 カー、ブルーム、キーン、猪俣の1941年夏合宿およびブルーム、キーン、カーの40年以上にわたる交流については、Green (157~160)、Kerr (1982) も参照。
猪俣正 (James Tadashi Inomata) は、カリフォルニア、ロサンゼルス生まれ。本籍・宮城。1938年台北高等商業学校卒。『台北高等商業学校一覧 昭和十三年度』、116ページ参照。
ブルームの死を哀悼する文章でカーは、日米開戦間近となった時期の合宿に、日系アメリカ人猪俣が参加していることが怪しまれ、3人の海軍情報将校が、合宿場所に調査のため来訪した経緯について述べている (Kerr 1982: XXI)。合宿終了後、ブルーム、キーン、カーはコロンビア大学での学業を続け、猪俣はブルームに紹介されたアジア関係書店・オリエンタリアで働く。真珠湾攻撃を知った猪俣は、危険を感じて終夜営業の映画館に身を潜めて過ごす。その後、コロラド大学海軍日本語学校に教員として勤務した。Military Intelligence Service (MIS) Registry Merged ([https://java.wildapricot.org/resources/Documents/WI1%20MIS%20Registry%20\(Merged\)%20July%202007.pdf](https://java.wildapricot.org/resources/Documents/WI1%20MIS%20Registry%20(Merged)%20July%202007.pdf)) 参照。最終閲覧日2016年6月17日。
- 17 *Formosa Betrayed* 303~4を参照。
- 18 沖縄公文書館の4E01017には、育霖の遺児Kenneth K. Wangからカーへの1981年3月2日付、カリフォルニア発信の手紙がある。“I have heard of your name from my mother since I was a little boy. She told me and my brother many stories about my father and you [...]. Many Taiwanese are very grateful for what you have contributed to the history and the freedom struggle of Taiwan [...]. We really need someone like you to remind Americans the rights of Taiwanese [...]. An establishment of a democratic Taiwan should meet the very interest of the United States.”
- 19 邱永漢は「検察官」で王育霖の228事件での失踪を、育徳の日本からの強制退去命令裁判をめぐって「密入国者の手記」を書いている (『密入国者の手記』所収)。
- 20 金関丈夫 (元・台北帝国大学教授) は、228事件時のカーの行動と、国民党政府、大陸中国の双方からカーに浴びせられた非難について、つぎのように書いている。「カーは大いに活躍したらしく、台湾人の側から物を見る立場に立って、事件中の出来事を、大小となく本国に知らせていた。三月九日以後、事件の主導権が国民政府側に移り、カーのそうした活躍は、当然彼を危険な立場におくようになった。身辺さえ危なくなると、彼は急遽本国へ飛び去ってしまった。(中略) 中共の立場から書かれた二・二八事件に関する一・二の書物を見ると、カーは当時アメリカ帝国主義の手先として活躍したように描かれている」(63)。カーは台湾では危険人物とみなされたため、その後の金関との文通は他人の仲介を経て行われた。与那原 213-216, 261を参照。
- 21 邱永漢『濁水溪』第2部には、「私」が228事件時に「ロイド氏」のジープに乗って事件現場をさまよひ、「蘇守謙」判事 (王育霖をモデルとすると考えられる) の虐殺死体を発見する様子が描かれている。「ロイド氏」は、自分は「民意を無視した」アメリカの政策に反対し続けてきたが、効果は薄かったと嘆き、「私」は

- 「台湾人の暴動を煽動した(?)ロイド氏」が台湾を去るにいたる経緯について述べている(64f, 68f).
- 22 1951年4月25日付のスタンフォード大学側「セミナー」関係者へのメモランダムでゴヒーンは、「セミナー」はカーの1947年案(後述)に基づくものであると書いている。“At our meeting on Wednesday, April 11, Jack Kerr and I agreed to work out a plan for the Tokyo-Stanford seminars on the basis of Jack’s proposal of 1947, An Institute for American Studies in Japan”(SC266 1:5). Jackはカーの愛称。このメモが1951年4月付であるのに対し、「セミナー」の第1回は1950年7月～8月であるため、第1回「セミナー」とカー案との関係については、さらに確認が必要であるが、第1回カー原案に基づいたものであると考えてよいだろう。
 - 23 「最初にあれ(東大のアメリカ研究)を考えた人は、スタンフォードのジョージ・ケアという人です。(中略)沖縄の専門家ですけれども、彼に聞くと、コロンビアの名誉教授になっている角田柳作さんが、ずっと昔からいっておられたから、自分がスタンフォードでいい出したというこでしたね」(209)。嘉治からゴヒーン宛の書簡(1952年5月14日)で嘉治は、朝鮮戦争からの短期休暇で東京に来ているGIたちでこった返すホテルに、アメリカ側から「セミナー」に参加した大学教授たちが宿泊せずに済むよう、カーとともに手配を進めたと報告している(SC266 1:7)。
 - 24 当時、ロックフェラー財団人文科学部門のディレクターであったファーズは、1959年11月9日付の業務日誌で、アメリカで台湾についての専門的知識を有するのは、カーただ一人であるとしている。この資料(Fahs)の存在を教示いただいた越智氏に感謝する。
 - 25 ゴヒーンは1950年にスタンフォード大学哲学部の学科長に任用されているが、このポストへの着任以前に、学長スターリングより、東京大学とのセミナー実施責任者となることを要請されている。日本についてなにも知らない自分が、この役割を引き受けることに奇妙な感じがしたとしている。<http://web.stanford.edu/dept/news/pr/94/940330Arc4358.html> (最終確認2016年7月5日) 参照。カーのスタンフォード就任が1949年6月であるから、ゴヒーン就任以前に、スターリング、バス、カーなどにより「セミナー」の素案が作成され、その後ゴヒーンに実施が依頼されたものと考えられる。カーが後日、「セミナー」設立由来についての記録を作成(後述)し、ゴヒーンに提出しているのは、この事情によるものであろう。
 - 26 SC0265, SC0266, SC0267. そのほかスタンフォード大学所蔵のカー関係資料としては、フーヴァー研究所所蔵のGeorge H. Kerr Papers (1943～1951)、フーヴァー図書館のMaterials relating to Formosa from the collection of George H. Kerrがある。
 - 27 バス(1903～1998)は日本軍フィリピン侵攻時、マニラの日本への開け渡しを行い、1942～45年戦争捕虜となった。戦後1年間アメリカ戦争情報局(OWI)に勤務。スタンフォード大学での職務と並行して、マッカーサー率いる連合国軍民間情報教育局(CIE)の文官コンサルタント。1948～49年在日本アメリカ大使館の文化コンサルタント。「セミナー」については、あらかじめマッカーサーの同意を取り付けている。<http://news.stanford.edu/news/1999/april21/>

membuss-421.html 最終確認 2016年5月30日

- 28 松田は「エヴァンズ〔引用者注：ロックフェラー財団〕が日本を訪れていたであろうどそのとき、スタンフォード大学のジョージ・カー教授は偶然にも日本に滞在していた」（松田『ソフトパワー』263）としているが、筆者はカーが1952年に東京に滞在していたのは偶然ではなく、「セミナー」関係の業務で来日していたものと考えている。
- 29 この間のカーの行動と、面談した人物を列記する。米日文化交渉関連の重要人物との面談を重ねて「セミナー」を立案していることに注意したい。1947年4月30日カー、上海出発。5月東京で蠟山、ハーバート・ノーマン（1909～1957。日本史研究。カナダ外務省。GHQ対敵諜報部課長）と面談。ハワイへの移動中、セミナー案発起書作成。5月スタンフォード大学で学長ウィルバー、バス、ヤマト・イチハシ（市橋倭）と面談。5月～8月、グレーヴス、角田柳作、キーン、ボートン、フェアバンク、ヘンダーソン、ライシャワー、オーウエン・ラティモア、ファーズ、ジョージ・テイラーと面談。7月3日、ジョン・ロックフェラー三世に発起書を見せる。
- 30 角田は1929年、コロンビア大学に「太平洋をはさむ二大国家間の相互理解を促進する最善の手段としてアメリカに日本文化センターを創設」している。ボートン、559-63 ページ参照。カーは角田が戦前、日本に小規模のセンターをつくり、自分がアメリカ社会・歴史・文化を学ぶ日本人学生のコンサルタントになりたいと語っていたことが、「セミナー」の発想のもとになっていると記している（SC265 3 :1）。
- 31 SC265 3:1 のサンソム、ゴヒーン、カーの書簡（1956-57）でカーが辞職にいたる経緯の概略を知ることができる。
- 32 この文章が所収された『東京大学アメリカ研究資料センター年報』は「セミナー」開始30年を記念する号であり、「セミナー」の内容が整理されている。「セミナー」が占領軍のサポートを受けつつも、民間レベルで行われたものであることを、ゴヒーンは強調している（71）。「セミナー」で取り上げられたトピックには、「日本におけるアメリカの民主主義の受容と反発」（5）「デモクラシーの危機」「社会のセキュリティと国家セキュリティ」（7）、「アメリカによる占領と日本の将来」（77）、都留重人「共産主義脅威と超国家主義」（91）など、時代の様相を強く反映したものが含まれていた。スタンフォードのノールズは、52年度「セミナー」報告で、カーが東京に滞在して準備を行い、セミナーの内容面にも貢献したと述べている（75）。
- 33 神田駿河台・日本雑誌記念会館の中にあったフーヴァー図書館東京オフィスのことと思われる。1952年に閉鎖（Fang 108-110）。
- 34 中村、山岡編（2010）、山岡（2013）、Hooperを参照。
- 35 台湾独立運動家。辜，*Formosa Betrayed*の日本語翻訳者・蕭成美（Seng-bi Shaw）、同監修者・川平朝清は1944年～1946年台北高等学校の同級生。辜は228事件以降、日本に亡命、台湾独立建国聯盟を結成する。1972年、台湾帰国、台湾独立建国聯盟から除名。沖縄県公文書館カー文書には、辜，蕭，カー，陳以徳（Edward I-te Chen: 1930- フィラデルフィアのUnited Formosans for Independence 主席）の書簡が数多く残されている（GHK4E01047, 4E01056, 4E01063）。*Formosa Betrayed*の翻訳は最初、邱永漢に依頼されたが（邱よりカー

- 宛, 1965年6月4日, GHK4E01047), 最終的にはシアトル在住の蕭によって翻訳されることになる。
- 36 山岡道男 “Participants List of the USA Council of the IPR” https://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/33669/4/KenkyuShiryoShirizu_1_Dai2Sho.pdf 最終閲覧 2016年5月31日。
- 37 GHK5J01016 には, 事件の経緯やカーとテイラーの不和についてのより詳しい情報が含まれている。
- 38 カーの第1期台湾時代からの知己で, 台湾独立運動関係者と思われる Ku Wei-fu (辜寬敏?) 宛書簡で, 訪米中に訪問すべきひとびとを紹介するなか, カーは, テイラーとその周辺のワシントン大学関係者は, 熱烈な親蒋介石派で機会があれば Ku をアメリカの蒋介石のスパイに売り渡すであろうので, 関係をもたないようにと忠告している (GHK4E01047, 1965年7月11日付)。
- 39 Cummings, “Allen and Taylor at Washington”. Sanders 93-95, Schrecker 94-112 を参照。
- 40 Ashizawa は, 元フォード財団ハワードの聞き取りから, マッカーシー時代にはフェアバンクスなどの大物中国研究者が弾圧に会い, フェアバンクと比べてはるかに保守的だったテイラーとフェアバンクのあいだには激しい敵対関係があったという発言を引用している (241)。
- 41 SC266 2:10 のカーからゴヒーン宛書簡 (1956年9月24日消印) でカーは, マッカーシズムの壊滅的な破壊力は, ロスウェルを ICA 資金確保と研究所存続のために, 右翼に依存せざるをえないまでに追い込んだとしている。
- 42 カーは, 1955年6月10日付のジョン・D・ロックフェラー3世への手紙 (SC266 2:8) で, 自分が1947年にできたばかりのアメリカ研究セミナー案を見せたことに触れたうえで, ゴヒーンを東京で毎年開催されているアメリカ研究セミナーの議長であると紹介, ゴヒーンが進めている東京スタンフォード・センター計画案への協力を呼びかけている。SC265 3:1 の1960～62年のゴヒーンからカー宛の手紙で, ゴヒーンが東京スタンフォード・センター設立案について, カーの意見を求めていたことがわかる。
- 43 http://www.iucjapan.org/html/50th_sympo_j.html 最終閲覧 2016年6月1日
- 44 http://iclp.ntu.edu.tw/index.php?option=com_content&view=category&layout=blog&id=1&Itemid=1&lang=ja 最終閲覧 2016年7月12日。